

博士論文審査結果の要旨

提出者 濱崎 加奈子

濱崎加奈子氏が提出した論文『香道の成立をめぐる諸問題―香と連歌と王権―』は15世紀末から16世紀末までの百年間を中心にして、その間における香道形成のプロセスを多角的な視点から考察した論文である。

最初の香会の記録で足利義政に仮託される『五日雨日記』が成立する文明年間（1469～87）から、織田信長によって東大寺正倉院の名香「蘭奢待」が切り取られる天正二年（1574）までのほぼ百年間が考察の対象となっている。

濱崎氏が、香道成立の研究にあたって、従来にはない視点として打ち出しているポイントは二つある。一つは、香と連歌との関わりであり、もう一つは、香の政治性、具体的には日本の王権のシンボルとしての香の問題である。これによって、氏の論文は、大きく、第Ⅰ部「香と連歌」、第Ⅱ部「香と王権」の二つに分かれている。

第Ⅰ部「香と連歌」は、四つの章「香と連歌」「香の起源神話」「香道と規矩の成立」「名香と名香録」から構成される。

第一章「香と連歌」は、先に述べた『五日雨日記』と、連歌師牡丹花肖柏が判詞を書いた『名香合』の言説分析であり、そこでは、香道の成立に連歌師が決定的な関与をなしており、連歌的な発想が香道の成立に大きく働いていることが明らかにされている。

第二章「香の起源神話」では、この論文で初めて本文が公開される『香之記』（竹幽文庫蔵）を用いながら、古代的な香りの思想の問題や、花山院・源実朝といった通常ではありえない始祖伝承をもつ香道の起源神話のあり方が分析される。

第三章「香道と規矩の成立」では、同じく『香之記』によりながら、香の作法の成立や香の「家」や「流儀」の意識の生成が述べられる。

第四章「名香と名香録」では、芸道成立の重要な契機として「名づけ」が問題とされ、茶の「名物」に先駆けて「名香」が生まれていることや名香リストの編集が語られる。

第Ⅱ部「香と王権」は、第一章「『太子』の誕生」と第二章「蘭奢待と王権」によって構成される。

第一章は、名香「太子」の生成についての考察である。「蘭奢待」と並んで、というよりも江戸中期までは名香のトップとされた「太子」について、中世の太子信仰の中でこの名香が成立してきたことが明らかにされる。

第二章は、足利將軍家の「蘭奢待」截香から、織田信長の截香までを歴史資料から綿密に追いかけたもので、『天正二年截香記』が詳しく分析され、香と権力が、日本の歴史上、最も激しく結びつく瞬間がヴィヴィッドに描かれている。

本論文は、香に関しての、はじめての学術的、体系的記述であると言ってよく、その宗

教的背景の記述や信長による蘭奢待截香についての本格的分析など、香道研究の新生面をひらくものである。

ことに、香が中世末期の文化界で浮上してくることにに関して、連歌および連歌師が決定的な役割を果たしたことが具体的に記述されたことは、本論文の最も大きな成果と言えるだろう。

連歌の中には、他なるものとの新たな結合を求める欲求が潜在しており、そのターゲットとして香が選択され、香を媒介にして詩的言語が新しい関係の布置の中に入っていくことを連歌師が楽しみながら追求していった、そのことが香会の成立に結びついたことを明らかにした功績は大きい。

しかし、それは、審査委員から反問が出されたように、実際は、連歌師宗祇が香会の中心にいたにもかかわらず、なぜ貴族の、しかも鼻のきかない三条西実隆が香道の始祖として喧伝されるようになるのか、という問題を不問に付すことにもなる。

香が香道として成立することについては、やはり、匂いによる王朝の記憶の回復という側面が重要であり、和歌を中心とする王朝文化をもっと主題として追求すべきであり、その中で連歌を位置づけるという作業が必要であろう。

また、これも審査委員から出された疑問だが、『五日雨日記』を文明年間の資料として用いていいか、ということも問題として残る。『五日雨日記』が、16世紀末、安土桃山時代の、足利義政回帰の言説群の一つである可能性も強い。

こうした課題の指摘はなされたものの、それは本論文の価値自体を損なうものではなく、むしろ、この論文が開拓した新生面をこそ評価すべきである、というのが、審査委員全員の意見である。よって、本審査委員会は、博士（学術）の学位を授与するにふさわしいものと認定する。